

[34]

氏名	中 ^{なか} 山 ^{やま} 創 ^{そう} 太 ^た
博士の専攻分野の名称	博士(文化交渉学)
学位記番号	東アジア文化博第6号
学位授与の日付	平成26年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	歌川国芳研究 —19世紀浮世絵における文化交渉のかたち—
論文審査委員	主査教授 中谷伸生 副査教授 松浦章 副査教授 内田慶市

論文内容の要旨

本論文は、19世紀に江戸で活躍した浮世絵師歌川国芳(寛政9 - 文久元年・1797 - 1861)が、中国や西洋の美術文化を含めた同時代美術との接触の中で、いかに自己の表現を確立したのかを明らかにすることを目的とした研究である。

内容構成は以下の通りである。

序論

第一章 浮世絵師の絵手本利用

第二章 歌川国芳の魚類画にみる「写生」と「写実」

第三章 歌川国芳の運動表現

第四章 歌川国芳の画面構成—ワイドスクリーン作品を中心に—

第五章 《誠忠義士肖像》の揃物にみる「写実」

—近世日本、中国、朝鮮における肖像画をめぐって—

第六章 洋風表現にみる国芳の試み

第七章 国芳から明治時代へ

結論…159

国芳は、文化5年(1808)頃に初代歌川豊国(明和6 - 文政8年・1769 - 1825)に入門し、美人画や役者絵だけでなく、武者絵、風景画、戯画などの幅広い分野の作品を手掛けており、当時の人々から「武者絵の国芳」、「狂画の国芳」などと評されていた。彼は師風を受け継ぐに止まらず、同時代絵師の作風を参考に作品制作に取り組んでいたとよい。国芳は、18世紀以降盛んに流入していた、諸外国文化も学習材料の一つとして捉えており、とりわけ洋風表現に関心を示していた浮世絵師である。近年、諸氏の研究によって、国芳が参考にしていた洋書挿絵や銅版画の存在が明らかにされつつあるが、洋風表現を自身の画風にいかに適応させたのか、という点については多く言及されてこなかった。また、国芳と諸外国美術をめぐり研究は、洋風表現を中心に語られてきたとよく、中国や朝

鮮といった東アジア地域との関連はあまり追究されてこなかった。東アジア美術を考える際、江戸よりも先に舶来書、あるいはそれらの翻刻本、翻案本などの情報を得ていたと考えられる上方の版本制作は重要な位置を占めていたとよい。従来の研究によって、国芳の作品は、葛飾北斎や勝川派といった江戸の浮世絵師との中で語られることが多かったが、上方の版本絵師を含んで改めて考察する必要があるといえよう。

同時に、18世紀半ば以降流入していた、洋風表現、明清絵画などは、その表現方法は異なるものの、「写実的表現」を特徴としていた。とりわけ洋風表現に関心を示した国芳が、「写実」をいかに捉え、作品化していたのかを明示する必要がある。なお、国芳の作品には、人物や事物の姿態や形態によるものだけでなく、画面の人物と事物とが連動することによって表出される特異な「運動表現」を確認することができる。この「運動表現」は、彼の画業において特筆すべきものであり、とりわけ武者絵作品で顕在化しているといえる。彼が執着をみせる「運動表現」と諸外国文化との接触において、どのような位置付けができるのか留意しておく必要がある。上記のことを踏まえて、本論文では、以下の七章に分けて考察していくことにする。

第一章では、浮世絵師における絵手本利用について考察を行うが、日本における絵手本制作の嚆矢といわれる橘守国や大岡春卜らの絵手本と18世紀中頃から19世紀にかけて活躍した歌川派を対象をしぼって検証する。作品にみられる図様転用例を挙げつつ、狩野派や中国絵画をはじめ諸派の絵画の縮写を収載する守国や春卜の絵手本は、浮世絵師にとって貴重な情報源となっていたことを主張するとともに、著名な歌川派の絵師だけでなく幅広く受容されていたことを指摘する。

第二章では、浮世絵の一分野として、天保期に確立される花鳥画に含まれる、国芳の「魚づくし」の揃物についてみていくことにする。当時の美術界では、対象を現実的に描出することが行われており、その傾向は南蘋派、円山応挙、渡辺崋山などの作品に見出せる。国芳は「魚づくし」の揃物において、線描の使用を控えたり、波の描写に類型化されていないものを採り入れたりするなどの趣向を凝らしている。国芳は、本揃物において「生態描写」に重点を置いていたに違いないが、伝統的な画法と西洋画法を採ることによって既存の作品とは異なる表現を試みていたと主張する。

第三章では、国芳の「画法の研究」について、《通俗水滸伝豪傑百八人之一個》の揃物(以下、《通俗水滸伝》と略称)を中心に、文化期から文政末期に制作された武者絵から考察する。国芳は《通俗水滸伝》を契機に浮世絵師としての地位を確立するに至るが、同時代絵師の武者絵と比較した時、人物の姿態だけでなく、その仕草、表情などを描出することによって、画面の運動表現を顕在化させていたという特徴を指摘する。また、国芳は画面に空間性を持たせたり、上方で制作された版本挿絵を利用したりして中国趣味を描き出すなど、ある種の現実的表現を採り入れようとしていたことに言及する。《通俗水滸伝》は、その後の国芳の作品にみられる、洋風表現への関心や運動表現の展開を考える上で、重要な作品であったと位置づける。

第四章では、国芳の大判三枚続の画面構成を採るワイドスクリーン作品(以下、「ワイド版」と略省)に焦点をあて、彼の制作意図を作品から考察していく。国芳は、透視図法による空間性の描出、読本挿絵を典拠とする異時同図法的画面構成、見世物をはじめとする当世風俗の影響を採り入れることによってワイド版を形成していたことを明らかにする。

第五章では、従来の研究によって「写実的表現」と指摘されてきた《誠忠義士肖像》(嘉永5年・1852)を採り上げ、同時代に制作された肖像画と比較検討することによって、国芳の「写実」の意味を見出していく。また、同時期に東アジアで制作された肖像画を検証し、浮世絵という庶民の文化にまで、その影響を見出せることを指摘する。

第六章では、国芳の作品において、洋風表現が見受けられる作品を中心に扱うとともに、同時代の作品と比較することによって、国芳の洋風表現受容の様相を明らかにしていく。国芳の洋風表現は、主に①透視図法を用いた奥行のある画面構成、②特異な描写対象(外国人、妖怪など)、③人物の顔貌や馬の筋肉にみられる迫真的描写に用いられている点に特徴があることを提示したい。

第七章では、安政期に制作された国芳の絵本である『風俗大雑書』、および『国芳雑画集』を考察するとともに、後代の絵師にみられる彼の影響をみていく。「西洋画法」という従来の表現方法とは異なるものを採り入れた19世紀の浮世絵の制作姿勢には、明・清、朝鮮王朝などの東アジア美術と類似するものが見出せる。その潮流の中で、国芳は運動表現を主体に、独自の「現実的表現」を確立していたことを指摘する。加えて、国芳は観者に親しみのある表現を提示することをも忘れなかった浮世絵師である。その点にまた「国芳らしさ」を垣間見ることができよう。

論文審査結果の要旨

中山創太氏の論文は、19世紀に江戸で活躍した浮世絵師の歌川国芳が、日本国内および中国やオランダの美術を学習しながら、どのようにして独自の表現を確立したのかを実証的に明らかにしたものである。

論文全体の構成については、今後の研究に俟たねばならない部分があるとしても、中山氏の研究姿勢は、徹底した実証主義的立場で貫かれており、その手堅さは特筆に値する。とりわけ、さまざまな資料を発掘し、それらを縦横に駆使して、「武者絵の国芳」、「狂画の国芳」などと評されていた国芳を、日本の浮世絵史の中から一旦外して、広く海外の美術との比較に力点を置いている。

この研究で中心を成しているのは、国芳の「運動表現」についての論究であり、中山論文は、資料をていねいに採り上げ、国芳の画面には、どのような「運動表現」が実現されているのかを明らかにした。とりわけ武者絵作品で顕在化している「運動表現」と諸外国文化との接触において、どのような位置付けができるのかを考察した。それらの考察においては、日本における絵手本制作の嚆矢といわれる橘守国や大岡春卜らの絵手本に着目し、歌川派に対象をしばって検証した。これらの研究は、先行研究を超える新たな主張を含むものであり、重要である。

中山氏の研究で、とりわけ注目すべき箇所は、「写実」の問題であり、国芳の洋風表現受容の様相の解明である。国芳の洋風表現は、透視図法による奥行のある画面構成、そして、特異な描写対象、さらに、人物の顔貌や馬の筋肉にみられる迫真的描写に特徴があることを指摘し、「写実」表現における国芳の特殊な立場と独創性を明らかにしている。

本論文によって、これまで江戸を中心に語られてきた日本のみの一国主義による「浮世絵史」ではなく、中国やオランダなどの海外の文化、さらにそれらを流布させる上で有効

な機能を有していた上方文化との接触を含む、幅広い交流の実態の一端が明らかにされた。
よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。